

# 村山由佳・『海を抱く』（I）

酒 井 英 行

## 1 光秀・空虚な自我

『海を抱く BAD KIDS』（一九九九年七月、集英社。この作品は文庫化にあたり、加筆・訂正されているので、テキストには集英社文庫を使用した。以下、『海を抱く』と略記する。）の主人公の一人として設定されている山本光秀。七歳の時から始めたサーフィン。高校三年生の現在の、「朝早くふとんを抜け出して、学校へ行く前に海に入る。居眠りしながら授業をやり過ごし、休み時間は悪友ともくだらない話で盛り上がり、放課後はまた性懲りもなく海に入る……」という光秀の生活は、サーフィン中心に回転していると言っても過言ではない。アマチュア選手権でチャンピオンシップをとり、プロになることが光秀の目標である。サーフィン以外のあれこれを、生きていくことの周縁に追放している光秀。サーフィンだけが光秀の唯一のレーゾン・デートルであるかのように……。しかし、この生の様態は、彼がアイデンティティーの確立を果たしたその帰結として選び取られた生き方なのであるのか。

波に乗るのは僕にとって、限りなく自然で、しかも不可欠なことなのだった。

誰もが飯を食ったり、呼吸をしたりするのと同じように。

光秀は少年期の生の形をただ情性的に生きているだけであり、アイデンティティーを真摯に模索する苦悩とは無縁に、モラトリアムの時代を能天気生きていただけと見ることも可能であろう。自分が何者であるのか、自分が何のために生きているのか、といった苦悩を伴う迷いを素通りして、〈今、ここ〉にいてはなかるうか。人が皆、「飯を食ったり、呼吸をしたりする」のと同じレベルの、「自然で、しかも不可欠な」営みとしてのサーフィン。青年期の課題であるアイデンティティーの確立とは無縁の地平で、少年期の生の形をほとんど無自覚的に繰り返しているだけではないのか。

一日も早く彼らのようなたくましい肩幅を手に入れて、ボードを軽々と小脇に抱えて歩いてみたかった。もしいつかそうなれたらきつと、どんな厄介な波でも足の下にぐいぐい踏みしめて乗りこなせるに違いない、この世のすべてを意のままにできるに違いないと、単純に信じこんでいたのだ。

少年期のロマン的世界での自己英雄化の夢想。この子供の夢想を今現在に引き伸ばしているに過ぎないのではなかるうか。意識的に選び取るという決意もないままに、少年期の夢想を自分の人生の目標にしている光秀。彼は大人になることから逃げている子供なのかも知れない。「朝早くふとんを抜け出して、学校へ行く前に海に入る。居眠りしながら授業をやり過ごし、休み時間は悪友どもとくだらない話で盛り上がり、放課後はまた性懲りもなく海に入る……」といった日々の繰り返しの中で、彼がぼんやりと感じている空虚さは、アイデンティティーの確立を果たした帰結としてのものではない、「サーフィンで食っていきたい」という人生の目標を中心に回転している自分の生活に確かな手応えが感じられない空虚さではなかるうか。

あたかも自己のレーゾン・デートルであることを証明しようとするかのようにサーフィンに没入する光秀。

そもそも、サーフィンというのはなんというか、ひどく孤独なスポーツなのだ。べつにカッコつけて言っているわ

けでも、そう信じたがっているわけでもなくて、本来そういう性質のものなのだ。波と自分。自分と波。それで終わり。よほどの初心者でもない限り、そこに何かが入り込む余地はない。あるとしてもせいぜい、ボード一枚の余地でしかない。

サーフィンは確かに、他者を介在させない「ひどく孤独なスポーツ」ではあろう。「波と自分。自分と波。それで終わり。」という、自然の前に一人かぎりで対峙する営為ではあろう。しかし、サーフィンに没入することは、必ずしも、対人関係の希薄さを招来する営為とはかぎるまい。孤独な営為に没入しているからこそ、それから離れた世界では、むしろ濃密な人間関係を求めてしまうという心性は自然な精神構造であらう。

ただ、昔からそんなふうな目で海を眺めてばかりいたせいだろうか。

気がつくとい僕は、いつのまにか人とのつき合いにおいてまで、相手との間に一定の距離をおいて観察するのが癖になってしまっていた。おまけに、距離をおいていることを相手に悟られるのもいやで、それを隠すためにやたらとどうでもいい軽口ばかりたたいてしまう。いつてみれば冗談で武装しているようなものだ。

僕とつき合った女の子たちはたいてい、最初のうちこそ「山本くんて面白いから好き」などと言って笑いころげてくれたものだが、別れるころには、その感想も変わってしまったていた。

「どうしてふざけてばかりなの？」

「あたしと真面目な話をするの、いやなの？」

「なんか、二人でいるのに一人でいるみたいだった」

……という具合に。

海（波）を距離をおいて観察することは、確かに、サーフィンには不可欠な行為であつただろう。自己のレーゾン・デートルであるかのようにサーフィンに明け暮れる光秀にとつて、それが習い性となつていたとしても不思議ではない。しかし、彼が自己申告している対人関係におけるディスコミュニケーションは、果たして、サーフィンに由来しているのだろうか。他者との間の生きた真の關係性が彼に不在なのは、サーフィンに没入している結果なのであるか。「冗談で武裝」することで隠しているのは、本当に、「相手との間に一定の距離をおいて観察する」癖なのであるか。

光秀は未成熟さを露呈しているだけなのではなからうか。自己を冗談で武裝せざるを得ないのは、他者とのコミュニケーション・スキルが分らないからである。他者とどう関わっていけばよいのか分らないからである。心を開いて自己を相手に投げ掛ける、という真の対人關係が取り結べないのだ。「冗談で武裝」することによつて光秀が隠そうとしているのは、そうした彼の未成熟性である。冗談を振り撒くことで、ありのままの自分を見せず、他者と表層的に関わり、真実の人間關係をやり過ごしているのである。

光秀がつき合つてきた「女の子たち」。彼女たちは、「冗談で武裝」することで、真の人間性を見せず、少年期のロマン的世界に自閉する光秀に、不満・不信感、深い空虚感を投げ掛けていたのである。親密な融和感を求めても跳ね返される彼女たちは、光秀との關係性に傷つき、疲れているのだ。それぞれの安定した自我を崩し合い、相互に浸透し合うことになから生起する親和的な何かが得られない虚しさ。「疲れちゃった」、「山本くんというの、もう疲れちゃったって言うてるの」と言うリョーコはそのことを訴えているのだ。感情のデリケートな交流が不可能な關係の味気なさ。關係性が成立しない苛立ち、關係性から疎外される淋しさ。光秀には相手のそのような心が読めないのである。光秀には、他者の心と思ひやる想像力、他者の痛みに共振する共感能力が欠如しているのである。そうした能力を身につけることこそが人間としての成熟ということであるはずだが、光秀はそうした成熟を獲得していないのである。「彼女たちが離れていったのは、

サーフィンばかりに夢中の僕がろくにかまわってやらないのが不満というだけ」であるはずがない。未成熟性を露呈する子供の部分に見切りをつけて離れていったはずである。

高校に入ってから、つき合った女は何人かいたが、いちばん長続きの例で三か月だった。

でも、僕は僕なりに彼女たちを気に入っていたのだ。そうでなければ三日だってつき合えるわけがない。今回別れたりヨコにしても、告白された時はちよつとバカそうだなと思ひ、実際つき合ってみるとその通りだったのだが、顔とスタイルはけっこういい線いっていたし、とにかく明るくて性格に裏表のないところがよかった。

サーフィンに充実した確かな手応えが感じられない空虚さを埋め合わせようとするかのように、つき合う「女の子」を次々に取り替える光秀。しかし、「一番長続きの例で三か月」という短い周期でつき合う「女の子」を取り替える要因はサーフィンではないはずである。つき合ってきた「女の子たち」は、光秀にとって、掛け替えのない固有性を持った存在ではなく、取り替え可能な単なるモノに過ぎなかったのではなからうか。「女の子たち」としか呼びようのない、明確な顔立ちを持たない存在に過ぎなかったのではなからうか。「リョーコ」という記号化した名付けにも、顔立ちの剥脱化の心性が見て取れるであろう。「僕は僕なりに彼女たちを気に入っていたのだ」と光秀は言っているが、果たして彼は、彼女たちを愛していたのであろうか。

惚れている、ということとは、かならずしも愛することではない。惚れているのは一つの状態であり、愛するのは行為である。状態とは受容することであり、行為とは決定することである。

(ドニ・ド・ルージュモン『愛について』一九九三年六月、平凡社)  
光秀は、「女の子たち」に「惚れている」という「状態」をただ単に「受容」してただけであり、決して、彼女たちを

愛していたわけではあるまい。モノを氣に入るように氣に入っていただけである。リョーコを受動的に選び取った動機には、光秀の性幻想の様態が露出しているであろう。「顔とスタイルはけっこういい線いっていた」ことが最優先される氣に入り方。女性の存在価値をその性的身体に還元し、モノとして觀賞するセクシュアリティ。「バカそう」という人間性に関わる負性を置き去りにし、「顔とスタイル」という性的身体に局限して、女性の存在価値を査定する光秀の性幻想。無自覺的に、「男らしさ」の特待席に居座っているのである。女性を「愛する」ことは、光秀には不可能であろう。ここにも彼の未成熟性（子供性）を垣間見ることが出来るのである。

さて、光秀の人間関係の希薄さが、サーフィンにのめり込んでいったことの帰結とは言えないことは既に指摘した通りであるが、その淵源は彼の家族関係の複雑さではなからうか。光秀の家族関係、光秀と両親との関係性の紋様が、彼の対人関係における関係性の希薄さを招来しているのではなからうか。

波の上に立ちあがる方法を教えてくれたのは、親父だった。

『海を抱く』の冒頭のこの一文によって、光秀にとっての、父親の存在の大きさ、父親との関係の重要さが端的に示されているのだ。光秀のレーゾン・デートルとも言えるサーフィンの基本を教えたのが父親であったのだ。光秀が七歳の時のことであった。光秀がそのために生きていると言っても過言ではないサーフィン、その最初の手ほどきをした父親、父親は光秀の神であり、光秀の人生を決定づけたと言っても言い過ぎではない。そのことは、冒頭の一文を象徴的に読み解くことでも引き出せるであろう。「波の上に立ちあがる方法」、それは、人生という海の上への自己定立の方法とも言えよう。光秀が人生を生きていく方途、それを指し示したのが父親であったのだ。「黒いウェットを着こんで浜辺に行く親父のあとを、黄色いボードのテールをずるずる引きずって追いかけながら、僕は、親父や、すれちがいざまに親父に挨拶する男たちに激しく憧れた。一日も早く彼らのようなたくましい肩幅を手に入れて、ボードを軽々と小脇に抱えて歩いてみた

かった」。父親は、光秀が到達したい憧れの対象であり、彼の手本となる先行者でもあったのである。

親父の教え方は、泣く子も黙るところか泣く子をさらに泣きわめかせるようなスパルタ式だったし、上と七年離れて生まれた一人息子だからといって特別扱いしてくれるわけでもなかったけれど、当時まだ素直だった僕は、あつという間にサーフィンに夢中になった。

作者・村山由佳が、光秀の父親を「信長」と命名しているのは頷けるであろう。親子の情愛を関係の外に追放し、突き落とすことによってはい上がらせようとする非情な厳しいしつけ、訓練を光秀に施したのである。彼の父親は、まさしく、突き放す、厳しい父、（父なるもの）の体現者だと言えよう。父親のスパルタ式教育法は、光秀の思春期以前には効果的であつたのである。「まだ素直」だった光秀が、「あつという間にサーフィンに夢中になった」のだから。

しかし、自分は自分だという自意識が形成される思春期の光秀においてはどうかであつたのか。父親の、親子の情愛を排したスパルタ式の育て方は、光秀にとっては、父親に支配され、征服されてしまうという自己否定感をもたらす不条理な押しつけに過ぎなかつたのである。自己存立を脅かす脅威であつたのだ。

そんな生活が中学二年に上がるころまで続いた。つまり、僕が親父の暴君ぶりにとうとう我慢できなくなつて叛旗をひるがえすまで、ということだ。一度爆発してしまつた後は、親父の何もかもが許せなくなつた。今でこそ、用があれば口をきくくらいのことにはするが、あのころは同じテーブルで飯を食うのも、同じ部屋の空気を吸うのもいやだった。

僕が十五で家を出て、千葉県の高校に通うために一人で下宿するようになったのは、そういうあれこれがあつたらだ。

「自分の気持ちの強さを誇張によって表わす」「ティーンエイジ・スカース」（デイヴィッド・ロッジ『小説の技巧』一

九九七年六月、白水社が用いられているであろう。自我意識がにわかに強くなる第二反抗期。光秀の父親への反抗感情の「強さを誇張によつて」言い表わしているのである。「同じ部屋の空気を吸うのもいやだった」という言い回しは、「ティーンエイジ・スカース」以外のなものでもあるまい。

ここで注目すべきことは、スパルタ式の子育てをする父親への反抗を語る表現として、「暴君ぶり」、「叛旗をひるがえす」という言い回しを作者が選んでいることである。ここで想起するべきことは、「信長」という名前の父親自らが息子に「光秀」と名付けたというプロットである。村山由佳は、光秀の父親に対する反抗を、明智光秀の織田信長に対する謀反に重ねて描こうとしているのだ。織田信長という「暴君」に、「叛旗をひるがえ」して殺した明智光秀……。光秀の口を借りて、「息子の俺に、親ア殺させる気かよ、なあ」と言わせているところに示唆されているように、『海を抱く』という作品には、父親殺しのストーリーが潜在的に仕組まれているのである。

「叛旗をひるがえ」して、「爆発」し、家を出る、という無謀で荒々しい光秀の行動は、象徴的（擬似的）な父親殺しと言えないであろうか。反発心・敵意を暴力的に投げつけることによって、父親に対して他者性を突きつける言動であったはずだ。父親の分身という光秀のポジションを逸脱する儀式であったはずである。父親の権威・支配から脱して大人になるための通過儀礼。光秀に自己確立がなされているわけではないが、自己確立へのあがきなのである。父親に反抗すること、先ず、自己分離すること。光秀の成長への第一歩。

しかし、「叛旗をひるがえ」して、家を出て、一人で下宿するという光秀の旅立ちが、父親の支配下に置かれた中途半端なものに過ぎなかったことを忘れてはなるまい。サーフボード・ショップの二階に下宿している光秀。その店のオーナーが父親の親友であり、そこを任されている克也が、「昔からうちの親父に息子の僕よりも可愛がられていたくらい」という設定である。光秀は克也の監視下に置かれているわけである。「要するにここは、キッチンや風呂ばかりかお目付け役まで



完備の、理想的な下宿というわけだった」という、光秀の自嘲的な語りに現れているように、父親からの自己分離が、実は父親の支配下に置かれたものに過ぎなかったのである。「理想的な下宿」という言い回しは反語的であり、父親にとって「理想的」だったというのである。光秀自身そのことに自覚的なのである。父親殺しが不発に終わった、その無力感を自嘲的に語っているのである。父親殺しは先送りされているのである。

それもそのはずであり、もともと、「叛旗をひるがえ」して、「爆発」するという象徴的な父親殺しが、実は、父親が布設したレールの上に乗ったものでしかなかったのである。父親の「信長」が息子に「光秀」という名前を与えることで、父親殺しを息子に指囃し、それを成し遂げさせることを通して、息子の成長を促そうとしたのである。しかし、人生の荒波に（「波の上に」）一人立ちするだけの成熟を獲得するには程遠い光秀、猶予期間として監視下に彼を置く必要があったのである。父親からの自己分離の第一歩を踏み出した（と思っている）光秀との間に確執が続くのは当然のことである。

このあいだふと、後輩たちに向かって（父親と）同じ説教をたれている自分に気づいて愕然としてしまった。もしかして、僕は親父に似つつあるんだろうか？

冗談じゃねえ、と思ったとたん、鋭い反発がつき上げてきた。

親父とはこの期（ガンの末期で入院中）に及んでもあまり顔を合わせなくなかったが、全部を姉貴にだけまかせておくわけにもいかなかった。

僕はむっとした。親父に似ていると言われるほど腹の立つことはない。

光秀の心の表に、父親への反発心、嫌悪感が渦巻いていることは疑う余地がない。「叛旗をひるがえ」して、「爆発」し

た反抗心、父親から自己分離しようとする独立心を前景化しているのである。しかし、光秀の反発の構えの隙間から、別の何かが垣間見えていることも確かであろう。父親との関係性の機微、敵意と愛着のアンビバレントな感情。心の奥底に渦巻いている父親への愛着心、それに蓋をするために述べ立てているかのような反抗心。

敵意と愛着心のアンビバレンス、しかし、愛着心と言うよりも、父親との同一性の自覚と言うほうが妥当であろう。父親との逃れられない同一性。父親への反発心、嫌悪感の奥底に、父親との宿命的な同一性の確認があることが露出しているのだ。「認めたくはないが、血筋ってやつかもしれない」。逃れられない血縁的な分身性。父親の分身（コピー）。光秀が「叛旗をひるがえ」して、父親から自己分割を図ろうとしたのは、この宿命的（血縁的）な同一性から逃れようとしたからだ。他の誰でもない自分を定立しようとするあがきであったのだ。父親とは異なった自己の確立。父親の分身に過ぎないことを認めることは、自己の尊厳性を否定することにほかならず、自己否定感を招来することにつながるであろう。しかし、その一方で、宿命的（血縁的）な同一性（分身性）の確認は、父親（分身）に対する固着感情（愛着心）を強化することでもあったはずだ。自己愛とも言うべき分身への愛着。「叛旗をひるがえ」した後の光秀の心のなかには、愛憎の相克感情が波立っていたのである。

光秀の心の底にある父親への愛着心。分身であるからだけではあるまい。自己確立を急ぐために反抗、嫌悪しようとしても、抗しがたく迫ってくる父親の人間的魅力。作者・村山由佳が光秀の父親にそのような人間的魅力を付与しているからだ。「都会の連中は、自分の都合で自然をねじ伏せようとする。ねじ伏せることができると思います。だがな、光秀、そんなものはただの錯覚だ」と言い聞かせる父親。

「……しかし、俺はな、光秀。この世には、人間が踏みこむべきでない、神の領域があると思う。神という言い方に抵抗があるなら、自然の摂理と言い換えてやってもいい。潮の満ち引き。季節の移りかわり。生き物の寿命。そういつ

たこと全部だ。人間だけが特別であるわけがない。……」

「間違えるなよ。何もお前に俺と同じように考えろと言ってるんじゃないぞ。いろんな考え方があっていい。いや、なけりや氣味が悪い。(中略)世の中、自分の考えが絶対的に正しいと信じこむ馬鹿な輩が多すぎるからな。そういう馬鹿にだけは、なるなよ、光秀」

すぐに答えを出そうとはするな、と親父は言った。ゆつくり、まど、にも、考えろ。おそらくお前にはまだ、時間に余裕があるはずだ。——そう言った。

老賢者のイメージが付与された人物像。光秀に、人生を生きていく上での大切な思想を語り、適切な助言を与えて、自らはやがてガンでこの世から消えていく父親。老賢者の人物像に他ならない。そして、父性原理、(父なるもの)の体現者である光秀の父親。自分の死を見つめながら、言い遣すべきことを光秀に言い聞かせる父親。光秀が「叛旗をひるがえ」すべき「暴君」の姿とは程遠い存在であるはずだ。無論、「暴君」の面影が皆無なわけではない。自分の考えに確信を持った者の断定的な命令口調。しかし、「暴君ぶり」を発揮しているわけではなく、生きてきた人生の年輪を、威厳を持って、息子に言い遣そうとしているのである。「まだ、時間に余裕があるはず」の光秀に、「自分がガンの末期であることを知ってしまった親父に向かって何を言えいいのか、見当もつかなかった」という、相手の痛みと心の奥底で共振する共感能力を獲得出来ない、大人になれない未成熟な光秀に。光秀が成長して到達すべき手本の姿を示しているのである。すぐに答えを出そうとしない、ゆつくりと、そして、まど、にも、考えること、これから大人になっていかねばならない光秀にとって、一番大切なことのはずだ。光秀の父親は、彼の絶対的な先行者である。反発・嫌悪とは裏腹に、それとは明確に意識しないままに、手本(先行者)としての父親を取り入れる光秀が既にいたことは確かなのであり、光秀にそのレディ

ネスは準備されていたのである。光秀がどんな時にも守ろうとしてきた、「最後の逃げ道をふさぐな」という信条が、「親父の教え」であつたことに気づくというように。ゆっくりと、まともに考えていくことで、光秀が成長を遂げていくであろうことは、予測出来る道筋なのである。

父親との宿命的な同一性の確認、成長していくための手本（先行者）としての父親の発見は、両親の関係性の読み替え、母親像の読み替えを促したはずである。光秀が十歳の時に、男と家を出て行った母親。光秀は母に捨てられた子である。

十歳の年に、おふくろが男と家を出てしまった時も、ほとんどショックは感じなかったほどだ。僕の関心のすべてはサーフィンに向いていた。認めたくはないが、血筋ってやつかもしれない。

「どんな厄介な波でも足の下にぐいぐい踏みしめて乗りこなせるに違いない、この世のすべてを意のままにできるに違いないと、単純に信じこんでいた」といった、子供のロマン的世界での自己英雄化の夢想から、サーフィンに我を忘れていたというのは嘘ではなかったであろう。しかし、語られているほどに光秀の心は割り切れていたのであろうか。母親が家を出て行ったことは、彼の心を素通りしてしまうほどに些細なことではなかったのであろうか。「上と七年離れて生まれた一人息子だからといって特別扱いしてくれるわけでもなかった」父親と、光秀が十歳の時に彼を捨てて家を出た母親。光秀の語りは、彼の孤独感、愛情飢餓感を回避しているのではなからうか。親子の情愛が充たされない淋しさ、語ることで傷つくことを恐れて、語りから消去しているのだと思われる。光秀がサーフィンに没入していったのは、父親の「血筋ってやつ」によるものではなく、両親との関係性における愛情飢餓、空虚感を埋めようとしてではなかったのか。深い空虚感を抱いて、広い海に一人で出て行く光秀の孤独感。

姉貴は自分たちを捨てたおふくろをいまだに許せないでいるらしいが、僕にはなぜかそういう感覚がまったくなくて、何といつてもあの親父だ、出ていきたくなるのも無理はないとすら思っていた。時にはおふくろのほうにだけ顔

を見せて、実家に寄らずに戻ってきてしまうこともあった。

父親の「暴君ぶり」に対する反発、嫌悪が前景化された評価であろう。母親の肩を持つ評価。姉と異なる受け止め方がなされているのは、エディプス期につながる母親への愛着が光秀にあるからであろう。しかし、父親との宿命的な同一性の確認が、その受け入れへと向かわせる時には、母親を「このひと」として客観的に見る目を持つてしまうのである。「わがままで、自信家で、奔放で、ナルシスト。そのくせ、お人好しで泣き虫。」「徹頭徹尾、『おんな』でしかない」という人物評価。父親と母親から等距離に自己分離して、両者を客観的に醒めた目で見られるように光秀がなっているのは、ある種の成熟が彼に訪れているからだと言えよう。「親父とおふくろが別れたのは、お互いの性格が招いた当然の結果だったのかもしれない。あのころはおふくろが親父にやりこめられて泣いてばかりいるように見えたものだが、よく考えてみると、泣くことで自己主張し続けるおふくろに親父が根負けした場合だって何度もあったような気がするのだ」。記憶の書き替えによる再定義。事実を立体的に見ることによって、真実を把握する思考力を身につけているのである。

光秀の成長した思考力、しかし、それは彼の無関心、白けた心性の裏返しに過ぎないのかも知れない。自分以外のことに無関心な自己中心性。「なんか、二人でいるのに一人でいるみたいだった」という「女の子」との関わり方と同じような関わりしか両親に求めていなかったのではないのか。姉貴は自分たちを捨てたおふくろをいまだに許せないでいるらしいが、僕にはなぜかそういう感覚がまったくなくて」という受け止め方は、寛容さとは異質な無関心からなされたものであろう。とは言え、母親を一人の女として客観的に見る光秀の成長を否定してしまうことは不当であろう。

ところで、「暴君ぶり」の内奥に、人間的な奥行きを持っている真実の父親像（見習うべき手本）を垣間見ていながら、光秀はなぜ父親への反発、嫌悪を述べ立て続けていたのであろうか。

これまでの数年間、親父は僕にとつて邪魔な存在でしかなかった。気分の子沈みを生のまま押しつけてくる親父

が大嫌いだっし、その減らず口も、意地っぱりなところも、すべてが癪にさわった。人前では傲慢なほど自信ありげにふるまうくせにじつは意外と小心者で、そんなところも一度見えてしまうと嫌でたまらなくなった。

でも、こうして相手が自分より弱い存在になってみると、感情にまかせて反発するわけにいかないせいもあって、僕は初めて冷静に親父を一人の人間として見るようになった。そして、認めざるを得なくなった。あれほど反感を覚えたのは、親父という人間が、僕自身の持っている嫌な部分を全部寄せ集めた存在のように思えたからだ、と。

要するに、ありがちな同族嫌悪だったのだ。親父が弱ってからでなければその程度のことにも気づかなかった自分を、僕は、つくづくばかだと思った。

光秀の父親嫌悪の要因が何であったのか、父親嫌悪の基底に何が隠されていたのか、が端的に描かれ、それと同時に、光秀のある種の人間的成熟が描かれている箇所として重要である。嫌悪すべき父親の属性とは、光秀自身の〈シャドウ〉、つまり、「明るい意識化された自分の反面に隠されている人格の暗い影の部分」、「心の中に秘めている自分の知らないもう一人の自分」(秋山さと子『夢診断』講談社、一九八一年四月)であったのである。光秀の「ダークサイド」を人格化した父親像。光秀が父親を必要なまでに攻撃、嫌悪していたのは、自分の〈シャドウ〉の存在を認めることを回避するためである。「自分の影を他人に投げかける」(投影の機制)(河合隼雄『無意識の構造』一九七七年九月)である。光秀自身の〈シャドウ〉を父親に投げかけて、父親を嫌悪し反発していたのである。「彼のいましなくてはならないことは、Aの生き方を攻撃したりすることではなく、Aに投げかけた自分の影を自分のほうに引きもどして、自分の無意識にある傾向を、どのように生きるかを考えるべきである。このようなことを、『投影のひきもどし』というが、人格の発展にはぜひ必要なことであり、勇気を要することである」と河合隼雄は言っている。光秀が父親に対する嫌悪を「同族嫌悪」であると認識したことは、この〈投影のひきもどし〉が出来ていることを意味するであろう。父親がガンで弱っていくという外部状況

を契機にした（投影のひきもどし）ではあるが、光秀の「人格の発展にはぜひ必要なこと」であったのだ。しかし、彼が自分の〈シャドウ〉をどのように生きていくかは、また別の課題であるはずであり、『海を抱く』という作品は、彼がその課題をやり遂げるために、藤沢恵理との関わりを用意しているのである。

さて、「信長」という父親が、息子に「光秀」と名付けたことで生起した（父親が息子に仕掛けた）父親殺しのモチーフ。父親の「暴君ぶり」に「叛旗をひるがえ」すという象徴的な父親殺しは頓挫した形で宙吊りになっているはずである。父親に対する嫌悪、反発から、「時には（愛人と暮らしている）おふくろのほうにだけ顔を見せて、実家には寄らずに戻ってきてしまうこともあった」光秀。母親と愛人とが暮らしている家を、「この家は僕にとって、自分の部屋より以上にリラックスできる、本当に居心地のいい場所」だと感じていた光秀。父親からの自己分離、母親への愛着だけを読み取ればいいのであろうか。父親を裏切った母親と愛人の家を、「居心地のいい場所」と思って、「リラックス」する光秀の心の奥底に、父親を裏切ろうとする意識がなかったとは言えまい。「戦えば勝てない相手」である「暴君」に対する、姑息な手段による謀反（裏切り）である。

死にそうな親父を病院に置いて、その（父親を裏切った）二人の住まいでくつろいでいる自分、という図を考える。とやはりいたたまれないものがあつた。アンフェアだと思った。これ以上はないほどひどいやり方で、僕自身が親父を裏切っている気がした。

父親がガンで入院という事態によつて、光秀の父親殺しは頓挫せざるを得ないのだ。「戦えば勝てない相手がたまたま勝負を下りてくれたせいで拾った、不名誉な不戦勝」は、光秀の望むところではないし、それでは父親を乗り越えて成長したことはないのである。彼は、「信長」に対する「光秀」にはなれなかったのである。

しかし、息子にとって父親が、「戦えば勝てない相手」のままでは、息子の成長は達成されないのである。息子に「光秀」

と名付けた意図は達成されないのだ。光秀の成長のために、父親のほうから再度父親殺しのモチーフを用意してやる必要があったのである。尊厳死を希望する終末期宣言書の代理人の署名を光秀にさせ、無理やり命を延ばす医療行為を医者にさせない責任を光秀に背負わせようとした父親。「呼吸器まで止めるとなると、どうしても自分が死なせたいみたいな罪悪感から逃れられない」、その「自分が死なせたいみたいな罪悪感」をあえて光秀に持たせようとしているのだと考えられる。父親殺しの罪悪感、おのれを殺させることで、乗り越えさせ、成長を促そうとしている父親。「人間であるようないろいろな、生きているようないないような状態」の父親に寄り添う光秀。「こういう時のためにこそ、親父は僕にあの署名をさせたんじゃないのか」、光秀は自分で生命維持装置を止めようと決心を固めたはずであった。

でも、何より大きかったのは、一刻も早くここから解放されたいという思いだった。この責任の重圧と、迷いのもたらす胃の痛みや吐き気から逃れられるなら、これ以上、親父の喉にからまるこの音を聞かずに済むのなら、何だかってしてやると思った。ほとんど脳の血管が切れそうだった。

光秀はここでも逃げているのだ。父親の尊厳死を託されている責任と、末期の父親を直視することから逃げ出したいのだ。自分が苦しむことから解放されたいのだ。自分の責任と死に向き合う恐さから逃れたいがために生命維持装置を止めようとする衝動に駆られているのである。父親殺しの罪悪感を自ら引き受けようとする理性的な行為者の座から下りてしまっている光秀による衝動的な父親殺し。「自分が死なせたいみたいな罪悪感」を背負う覚悟が固まっていけないのだ。

しかし、「こんなのは親父じゃない。もう、親父とはいえない」という本来的な父親に対する愛着心が、光秀を意識的な父親殺しに踏み止まらせるのである。父親から科された責任を果たそうとするのである。「俺、約束したんだ、親父と。ちゃんとその宣言書の通りにするって」、「全責任は、俺が持ちますから」、「この機械、止めて下さい」、「お願いします、先生」、「切ってください」。母親や姉や叔母に代わって、「全責任」を一人で引き受けようとする光秀。末期の父親に代わって、



自らが父親になろうとしている、と言えるのではないか。

これか。

手を伸ばす。おかしいほど震えている。

叔母が、金切り声を上げて僕の腕にしがみついた。

「やめなさい光秀！ あんた、自分の父親を殺す気なの？」

人さし指をのばしたまま、

(……つぶしゅう……ぜろぜろぜろぜろぜろ……)

僕はその音を聞いた。

(……つぶしゅう……ぜろぜろぜろぜろぜろ……)

あと数センチ。

人工呼吸器の本体の電源スイッチまで「あと数センチ」。「全責任」を背負って、文字通りの父親殺しを遂行しようとしているのだ。「叛旗をひるがえ」した象徴的な父親殺しが今まさに現実のものになろうとしているのである。しかし、「あんた、自分の父親を殺す気なの？」という声の残響が、光秀の手を動かさせないのである。

やがて、おふくろは僕のほうをふり返って、親父から手を離れた。その手が、まっすぐに機械へと伸びる。

カチ

と、小さな音がした。

母親の息子を思う気持ち、母性愛が、光秀に父親殺しを回避させたのだと言えよう。光秀に、「自分が死なせたみたいな罪悪感」を引きずらせない配慮。母性愛によって、光秀の父親殺しは頓挫したわけだが、しかし、「責任の重圧」から逃

げ出さなかった光秀がいたことは確かなのである。彼は、母親とともに、「自分が死なせたみたいな罪悪感」を背負いつつ生きていくはずである。その罪悪感の痛みに耐えることこそが、彼の成長の糧となるのである。父親殺しの心の傷に耐えながら、自らが父親になっていく成長。

## 2 恵理・ペルソナとの葛藤

藤沢恵理が最初に作品世界にその姿を現わすのは、教員室の前で、担任教師に呼び止められ、「悪いが、このグラマーのノート半分持っててくれないか。みんなに返すやつ」と頼まれる場面である。

「先生、いいですよ。これくらいなら一人で持っていけますから」

「そうか？ 重くないか？」

「大丈夫ですってば。私そんなにヤワじゃないです」

「それもそうだな」

「あ、ひどい」

にらむ真似をして笑いだしながら、私はノートの山を抱えあげた。

廊下に出るころになって、ふと気づいた。気づくと同時に、胸の底がすうっと冷えて、顔に浮かんたままだった微笑がフェイドアウトしていくのを感じた。

ああ、私またやったんだ、と思った。また、「いい子」を演じてしまった……。

「見られる自己」としての恵理は、その特異性を取り立てて云々する必要もなさそうな、どこにでもいる、学校社会におけるいわゆる「いい子」に過ぎない女子生徒として登場していると言えよう。担任教師から信頼されている女子生徒、〈女の子らしさ〉（愛嬌）を振り撒く、大人の男性から可愛いがられるであろう女子生徒。「先生お気に入り」の優等生……。

「コーヒーでもいれたげようかと思って」

ほっというてよ、飲みたければ自分でいれるから、あっちへ行つて、一人にして。

……言えつこない、そんなこと。

「うん、ちようど飲みたいと思つてたんだ」そして私は、甘えるようにつけ加えた。

「今日はエスプレッソの気分かな」

「ナマ言っちゃつて」

どこか気が楽になつたような顔を引つこめて下へおりていく良美さん（同居している兄嫁）の足音を聞きながら、私は枕を抱きかかえた。

学校での恵理と同じ恵理がここにもいるのだ。兄嫁に甘えるコツを知っている、無邪気で可愛い末娘。家のなかで、「いい子」で通り、近所の人々からも、「いいお嬢さん」と言われるのは当然であらう。〈見られる自己〉としての恵理が「いい子」であるのは間違いないまい。

「家や学校での『藤沢恵理』は、優等生で通っていた。勉強だろうとスポーツだろうと、何をやらせてもちゃんと周囲の期待通りにやつてのけるタイプ」。都が恵理を評して、「いつも自分のこと抑えちゃうの」、「あんたつてばすぐ、まわりの都合に自分を合わせちゃうとするから、ちよつと心配」と言うように、恵理は、家の内でも外でも、周囲の期待（思

惑」を先回りして汲み取り、それに添いたいという心性、周囲の顔色を見て、その思惑に自分を同化させていこうとする心的傾向があるのだ。「全部で九人が一軒の家に同居している」家庭のなかで、兄や兄嫁の顔色を窺わざるを得ない居心地の悪さ。そのなかで、「自分の居場所を獲得する方法」としての「いい子」役割の演技。「いい子」、「優等生」という他者評価は、恵理のこのような心理機制の積み重ねによって得られてきたものである。恵理自身が築き上げてきたものののだ。「期待される役割」を「あまりにも器用に」こなしてきた恵理……。

恵理のこのような役割演技それ自体に特異性が見られるわけではない。どこにでもいる普通の女子生徒と見做していけない理由はなさそうである。「誰に対しても素の自分をまげずにぶつかっていける」都をこそ特異な女の子と言うべきであろう。対人関係のなかで、「見られる自己」を意識せざるを得ない我々が、〈本質的な自己〉を抑圧して、自己演技に走られるのは自然な有り様であろう。

恵理の特異性は、自然な有り様であるはずの自己演技に、過剰な演技意識、自虐的な負の演技意識を持つていることにあるだろう。作品世界に登場した際の、「先生お気に入りの優等生」らしい言動をした恵理の自己省察にその特異性は露出しているはずだ。この振る舞いを本質的な自己、本当の自ずからのものとは思えない恵理。「いい子」が本当の自分の本来的な姿ではなく、演技によって仮構した自分ではないかと思ってしまう恵理。自己演技に対して自然性を仮構できなくなってしまうのである。「いい子」の役割を演技する自分の後ろ姿が見えてしまうもう一人の恵理がいるのである。演技する自分を醒めた目で見てしまうもう一人の自分、恵理はいわば自己分裂しているのである。「いい子」の演技をしてしまう欺瞞性、演技する自分の後ろ姿が見えてしまう過剰な自意識、恵理の自虐的な自己嫌悪・自己不信の痛苦はここに胚胎しているはずだ。

ペルソナというのは、正確には仮面のことだが、人が社会に対して見せている顔であって、たてまえのようなもの

である。他人の前では、誰でも外向きの顔を見せ、その蔭にかくれて、あまり自分が傷つかないようにかっこうをつけ、自分の素顔をさらけだしすぎて恥をかかないように、ある程度、仮面をつけているものである。それは自分を守るためだけではなく、相手を傷つけたり、恥をかかせたりしないための配慮でもある。(秋山さと子・前掲書)

ペルソナ(「外向きの顔」と「素顔」。「素顔」こそが誰にも見せない本当の自分であり、ペルソナは「たてまえのようなもの」、つまり、本当の自分とは異なる仮構された自分である、というのは確かであろう。しかし、恵理のように、「いい子」というペルソナを他者の前で被ることを「演技」だと感じて、激しい自己嫌悪に陥るのはどうであろうか。対人関係のなかに置かれているのが人間であり、誰にも見せない本当の自分だけを生きている人はいないはずだ。社会的存在としての我々は、必要悪のようなものとして、「外向きの顔」を持たざるを得ないのである。他者の前で、「外向きの顔」を仮構することは、否定すべき偽りの「演技」と言うわけではないはずだ。「自分の素顔」を隠すことは、社会に存在していくための「配慮」、つまり、エチケットであり、社会的存在としての人間には不可欠なものと言えよう。

鏡を見るのが、嫌いだ。

鏡の中には見慣れた、でもいつまでたっても見慣れない女が映っていて、こっちをぶしつけにじろじろ見つめ返してくる。その女の顔を見ると、私はちょうど、奥歯で銀紙をかんだみたいな気分になる。

鏡に映っている顔とは、「家や学校での『藤沢恵理』」の顔であり、「人が社会に対して見せている顔」であろう。いや、他者に対して見せているであろう(と自分が想像している)顔であろう。他者の目に映っているであろう「外向きの顔」は、直接自分では見ることが出来ない顔であり、鏡を通して見るしかない顔である。ペルソナの下の自分の本当の顔は、鏡にも映らないし、自分で見ることも出来ない顔である。その意味で、本当の顔とは、そのような顔が本来あるはずだと仮定した空想上の顔でしかない。ペルソナとは異なる「自分の素顔」は実体とは言えない。それが鏡に映らない虚像に

過ぎないという意味においても。次のように言つてよいであらう。「人が社会に対して見せている顔」(鏡に映っている顔)こそが自分の本当の顔であり、そうであると思つている本当の自分の顔は、実体のない虚像に過ぎないと。ペルソナは偽りの顔などでは決してなく、対人関係のなかに置かれてゐる我々の素顔であると言つても過言ではあるまい。社会のなかでの、演技によつて作り出された自分の総和こそが偽らざる素顔の自分に他ならない。

恵理はそのようには考えられないのである。鏡には映らない本当の自分(「私」)の実体性を前提にしているのである。鏡に映っている顔(他人の目に映っているであらう顔)こそが「私」そのものだとは思えないのである。「外向きの顔」(ペルソナ)もまた本当の自分(「私」)なのだ、と思うことが出来れば、自己嫌惡の苛立ちから解放されるはずなのだ。しかし、ペルソナを見知らぬ他人のようにしか感じられないのである。ペルソナとの間に深い溝が生じ、心が通ひ合わなくなつてゐる恵理。ペルソナを「その女」と他者化し、自己分離してしまふのである。虚像かも知れない「私」を絶対化して、鏡に映っている自分を見知らぬストレンジャーとして虚像化する恵理は、自意識が過剰なのかも知れない。演技する自分の後ろ姿を見てしまふ過剰な自虐的な自意識。「いい子」、「優等生」の役柄を演じるのも恵理、その演技に対する周囲の評価に違和感を抱き、心が白けてしまふのも恵理なのである。

恋に恋してゐるまわりの女の子たちの中にと、私だけが生々しくて汚らしい動物のように思えるのはどうしようもなかった。何よりいちばんいやなのは、この私が、そういうあれこれを優等生の仮面の下に隠して、平気でしらばつくて笑つていられる人間だという事実だった。

「汚らしい動物」のような「自分の素顔」と、「優等生」のペルソナ。恵理の深刻な自己嫌惡が向けられてゐるのは、「汚らしい動物」のような「自分の素顔」そのものに対してではない。その「自分の素顔」を、演技で作り出した偽りのペルソナで隠蔽してゐられる自分に嫌惡の苛立ちを向け、自己不信に陥つてゐるのである。先生や親、そして、世間の

幻想を「平氣」に演じ続けることが出来る自分に対する強い自己否定感。しかし、その期待される役柄を「平氣」に演じられる自分、と自己分析する恵理の自意識が自ずから明示していることは、その演技を決して「平氣」にやっているのではないという彼女の心の現実である。

自己演技を過度に意識させているのは恵理の自意識であろうが、彼女の過剰な自意識は何に由来しているのだろうか。「汚らわしい動物」のような自分も、優等生の自分も、そのどちらもが本当の自分だとうとうして思えないのであろうか。「汚らわしい動物」としか（恵理には）思えない自分自身のセクシュアリティ。恵理の自己嫌悪、自己葛藤の根源には、「生まれる性別をまちがえてしまった」という、自分が身体的に女であることを受け入れられない彼女の心の現実があるのだ。身体的性別と心理的性別の不一致。

誰が見ても、ひと目で女だとわかる。けれど、この私にだけはそれがわからない。自分が女に生まれてきたという事実が、生まれて十七年たった今でもまだ納得いかないのだ。気持ちを置きざりにして、体つきだけがどんどん丸みを帯びていく。そのことが苛立たしくてしやうがなかった。

自分の性自認を置き去りにして成熟していく身体……。成熟していく女である身体と心の折り合いがつかない苛立ち。都が言うように、「恵理の中には、男の子と女の子の両方が棲んでる」のである。「肉体的には女だけど、精神的ヘルマフロデイトス」。恵理のこのような心の形が、生物学的な性別として女である自分に抜きがたい違和感を感じるのである。精神的なヘルマフロデイトスであることを頭で自己納得することは出来ても、精神的なヘルマフロデイトスであることの心の葛藤・苦痛が取り除かれたわけではない。そういう自分を是認することは難しいのだ。社会通念（男／女の二分法）を追認して内面化している恵理には困難なのである。

道路工事をしている若い男の顎から汗が流れ落ちるのを見た途端に、「その場で彼にめっちゃめっちゃにされる自分を想像し

て膝から力が抜けるくらい興奮した」恵理と、「バスケ部の後輩の可愛い女の子を見ると、この子と裸でからみ合つてキスしたらどんな感じだろうって思つて、とたんに体がブルツてなる」恵理の同居。どちらの恵理も本当の恵理なのだ。「いい子」のペルソナによつては禁圧し切れない（密封してしまえない）セクシュアリティーの欲動に、自我を奥底から揺さ振られるしかないのである。

どうかしていると、自分でも思う。きっと体がおかしいのだ。でなければ頭がおかしいのだ。

「肉体的には女だけど、精神的ヘルマフロディトス」である自分の事実には耐えられないのである。（女らしさ）とは、男を好きになり、男とのセックスによつて満たされることだというメッセージを社会から受け取り続けていたであらう恵理。女の子に求められるセクシュアリティーの社会規範を追認し、内面化している恵理は、その自分の現実を自己承認することが出来ないのである。自分のセクシュアリティーに対する社会からの無言の圧力を強く感じ続けていたはずだ。社会が女の子に望ましく思う（女の子らしさ）の神話の強制に押しつぶされかけているのである。恵理という女の子一人の力では、自分のセクシュアリティーを承認することは不可能なのだ。「きっと体がおかしいのだ」、「でなければ頭がおかしいのだ」と自己否定するしかなす術がないのだ。自分の歪んでいる（と恵理が思い込んでいる）セクシュアリティーに対する苛立ち。激しい自己嫌惡に陥つて苦しむしかないのだ。

生物学的には——女性。恋愛の志向だけとつてみればトランスセクシャルにあてはまるかもしれないけど、肉体をともなう性的志向はヘテロセクシャル、あるいはヘテロ寄りのバイセクシャル。ただし、ヘテロとしての性的欲求の強さに関しては、いささか度を越してしまっていることは否めない……。

「どうかしている」と、自己否認する必要はどこにもないはずだ。恵理に自ずから備わっているセクシュアリティーに過ぎないのだから。恵理自身が、「これが自分なのだと認められない」ことが問題であるだけだ。そのように自己承認出来



ないことが恵理を苦しめているのである。都によって、それもひとつのセクシュアリティの形だ、「男の気持ちと女の気持ち、どっちにもなれるなら、どっちのことも好きになれるってこと」で、「素敵」なことだと肯定してもらうことで、恵理のなかで、「何かが動いた」ことは確かである。恵理の自己嫌悪の袋小路からの抜け道が見えかけているのである。それが自分自身のセクシュアリティの現実であるかぎり、恵理がその現実を自分のものとして受容していく、という自然な筋道。

「自分の中の欠落、というか『飢え』を満たしてくれるものが、「男の人」だと本能的に分かっている恵理。そうでありながら、同時に、「ほんとうに都に対する愛しさがこみあげてきて、だんだん彼女にキスしたくてたまらなくなつて」くる恵理もいるのだ。「甘やかな痛みを伴った気持ち」で……。

都とのキスは、私にとっては何ものすごく衝撃的な、ほとんど宇宙的なまでの体験だった。予想をはるかに上回る素晴らしさだった。これ以上唇を重ねていたら、脳みそがぐにゅぐにゅに溶けてしまうんじゃないかと思つて、怖くなくてやめたくらいだった。でも、都はそうじゃなかったのだ。

この体験から恵理が実感的に自己納得したことは、都に指摘されて、頭で理解していた自分のセクシュアリティとそれほど異なるものではないのかも知れない。しかし、実感的に自己納得することは、自分のセクシュアリティの現実を再定義することにつながる重要なことだと言えよう。都とのキスによって、恵理が新たな自己認識を得たことは間違いない。「心の欲望と体の欲望とがシンクロしていないのが問題なのだ。心のほうは女の子を求めているながら、体のほうは男の人を激しく求めてしまう。それが私のヘルマフロディトスだ」。「心のことだけではない」自己の問題に直面しているのだ。意識によって解決（自己コントロール）出来ない領域に踏み込んでいるのである。心と体の自己分離。自己を内奥から揺さ振り、苛立たせているものが、「心の欲望と体の欲望とがシンクロしていない」自分の現実であるという自己認識。一

時的には、「マゾヒスティックな自己嫌悪」を強める自己分析ではあるが、恵理を新たな地平に歩み出させる契機になる自己認識であったこともまた確かなのである。

「マゾヒスティックな自己嫌悪」を強制するセクシュアリティ、おそらく理性だけではどうにもならない自分の領域をなんとか改造しようともがく恵理。

男の人に抱かれてみて、この体が「死ぬほど」気持ちよくなるのを感じることができたなら、私もじつは単なる普通の女にすぎなかったんだと納得できるかもしれない。そうすれば、自分の中に男の子が棲んでるなんていうのは思ひすこしだとわかって、もう女の子を好きになつたりしなくなるかもしれないし、最悪の場合でも……この体のズキズキする熱さだけは消えてくれるにちがいない。

これまで知らないでいた自分に出会えることへの期待感。都とのキスが「素晴らし」かったという自分のセクシュアリティの現実をひとまず棚上げしておこうとするのだ。都に対して、「愛しさ」がこみあげてくるといふ心の現実から逃走したいのだ。「普通の女」に過ぎないことを自己確認したい恵理は、男／女の二分法の規範に囚われているのである。男／女の二分法による〈女らしさ〉の神話に同化してみようとするのである。

「ごく普通のサラリーマン風」の男と寝るといふ体験。初めての男にさしたる迷いもなく身体を投げ出した恵理。「これで、ほんとにおしまい？ たったのこれだけ？ こんなものがあ、世間で禁断の木の実みたいに言われているあれなの？」。「胸の芯が冷えて」いくような無感動に醒めていくだけのセックスでしかなかったのである。

あたり前のことだが、私の中の「ヘルマフロディトス」は、この程度のことでは少しも変化してくれなかった。それどころか、体の奥の熱を鎮める役にさえ立たなかった。

でも、ひとつだけわかったことがある。あの日の都とのキスがあんなに良かったのは、女の子が相手だったからじゃ

ない。たとえば女であっても、もしこの男みたいに初めて会う相手だったら、きっとキスを気持ち悪く思っただろう。今夜のことで、はっきりわかった。都とのキスが素晴らしかったのは、私が彼女を好きだからだ。彼女に恋をしているからだ。

恵理を見知らぬ男とのセックスに走らせた目的、自己改造は頓挫したのである。しかし、その企図の挫折は、結果的には、彼女に重要な自己発見をもたらすのだ。肉体的交わりの快／不快、素晴らしさ／気持ち悪さの要因は、相手が男であるか女であるかではなく、自分がその相手を好きであるか否かである、という自己発見。恵理の「ヘルマフロディトス」の葛藤・自己嫌悪の袋小路からの脱出口は見えてきているはずだ。性的欲望を親密に満たすものは相手に対する愛情・愛しさである、という道理。男／女はその要因ではなかったのだ。

恵理の愛情欲求と性愛欲求が都に一途に向かうのは当然であろう。「私にとって彼女（都）は、唯一無二にして絶対だった」、「ああ、抱きしめたい、と思った」、「今ここで、この海べりの道の真ん中で、思いきり彼女を抱きしめてキスしたい」。しかし、都へと向かう恵理のこの一途な欲求は受け止めてはもらえないのである。恵理の欲求に応えるセクシュアリティを都は持ち合わせてはいないのだから。「心の欲望」と「体の欲望」とが都に焦点化していながら、そこから疎外される恵理……。